

奄美・沖縄とラオス・タイ北部の少数民族の動物供犠

—比較民俗学と民俗の地域性—

川野 和 昭

(本館 主任学芸専門員)

一 はじめに

奄美の動物供犠に関する議論をいち早く始めたのは、山下欣一氏であった。「南島における動物供犠」(『南島研究』一〇・南島研究会・一九六九)がその初発である。そこで氏が着目したのは、奄美のシャーマンであるユタの関わる儀礼の中で行われる動物を殺し食べる習俗であった。

さらに、その問題点は「沖永良部における創世神話と動物供犠」(『南日本文化』五・鹿児島短期大学南日本文化研究所・昭和四七)、「喜界島における日光感精神話と動物供犠」(同書六・昭和四八)、「与路島・請島のノロとユタ」(同書八・昭和五〇)へと拡大していった。そしてこれらは、「奄美のユタの動物供犠」と題して、氏の代表的な著書『奄美のシャーマニズム』(昭和五二・弘文堂)に、問題点を要約する形で所収された。それによると、奄美諸島に見られる動物供犠を、

- 一 歳時習俗に関連する事例、
- 二 建築儀礼
- 三 葬送儀礼

の四つに分類した。さらにこれらは、「ユタの儀礼の中で実修するものと公的な部落共同体の行事の中で行うもの」とに分かれることを指摘し、特に第四の病氣平癒のための動物供犠にユタが深く関わっていることを明らかにした。

この山下氏の「南島における動物供犠」に触発されるように議論を展開したのが小野重朗氏であった。小野氏は、山下論文が発表された翌昭和四五年、「日本民俗学」第七一号の「肉と餅との連続—供犠儀礼について—」において、

一 年中行事の防災儀礼
二 不定期の防災儀礼……火災、病氣、新築
という二つの分類を示して、奄美・沖縄に見られるこうした儀礼は、殺した動物の肉を供物としないもので、犠牲とか命を捧げるとかいう意味での供犠性はほとんど見られないとした。この見解は、山下氏が病人の身代わりに動物を殺してヤクバレ(厄払い)をし、病氣を平癒させるという点に供犠性を認めたのとは大きく違うものであった。

しかも、小野氏は昭和五五年「牛—ツクリモノ・精霊・供犠—」(『隼

人文化』八・隼人文化研究会)において、殺した牛を神に供えることをせず、集落の人々で食べてしまうことに重点を置き、先の考え方を修正しつつ補強を試みている。それは、一九世紀末にロバートソン・スミスによって唱えられた「饗宴説」に依拠しつつ、「牛を殺して、その肉を神に捧げる場合は、牛は神のご馳走の素材に過ぎ」ず、「犠牲の意義からすれば、神に捧げるのよりも、人が食べてその聖なる力を身につけるとする方がより本質的だといえる」として、その供犠性を肯定したものと変化している。

以上がこれまでに我々の持ち得た奄美・沖縄の動物供犠に関する研究成果である。

ところで、筆者はこのところ一九九六年から一九九八年にかけての四回のラオス・タイ北部における現地調査をもとに、南九州から奄美・沖縄にかけての民俗文化をラオス・タイ北部の少数民族の文化の視点で読み解く作業を試みてきた。その結果両者の間に、竹山の焼畑、穀物の脱穀調整、竹細工、水田・河川漁撈などの生活技術をはじめ、焼米、豚食、瓜食(苦瓜や糸瓜)、筍、焼酎などの食習俗、一ツ家、高床、高倉などの建築文化、聖なる森の存在など生活文化全般にわたって極めて深いつながりのあることを指摘し得るようになってきた。しかも、今まで地域内における系譜関係として周囲論的に理解していた文化が、ラオス・タイ北部では少数民族の文化の違いとして存在するという仮設も考えることができるようになってきた。⁽¹⁾

さらに一九九九年五月にラオス北部ルアン・ナムター県ムンシン周辺のアカ族の村で見ることできた、新しい年を迎える前後の儀礼は、豚、鶏、犬を殺し、その肉をみな食べ尽くすということを伴うものであり、

名越左源太の『南島雑話』の世界を強く想起させるものであった。そして、山下欣一氏と小野重朗氏が議論してきた奄美・沖縄の動物供犠の問題と深くつながる可能性を予感させるものであった。

本稿では、山下・小野両氏の扱われた資料を中心とした奄美・沖縄の動物供犠の事例と、過去五回の調査で得たラオス・タイ北部のアカ族を中心とした少数民族の動物供犠の事例とを比較し、そのつながりの可能性について触れてみたい。また、そのことをとおして南九州から奄美・沖縄にかけての民俗文化の日本列島における地域性についても述べてみたい。

それでは先ず、奄美・沖縄の事例からあげていくことにするが、比較する便宜上、山下・小野両氏の分類を参考にしながら紹介することとしたい。

二 奄美・沖縄の事例

1 歳時行事の防災儀礼

(1) 『南島雑話』第四篇(名越左源太・一八五〇・嘉永三)

地カタメ

地がためとて、能呂久米どもの祭仕舞、村はずれの木に凶のごとく牛の腰骨又は足骨をさげ置く。其肉は村中男女悉く喰懸て如凶。



(2) 大島郡瀬戸内町須古茂⁽²⁾

旧十月の頃にくる庚申の日、正しく言えば旧八月のシバサシの後にくる庚申の日を、カネサル・カネモチなどと言って、この日は山から神が下って海に魚とりに行く日なので、山にも海にも行ってはいけないと言う。五十年前まではこの日部落で一頭の豚を殺して、そのヒラボネ（肩胛骨）を部落に入る右左二本の道の入り口と浜から上る道の入り口とに下げた。肉はその日に祭をするノロなど神人にも食べさせ、部落民も分けて食べた。この豚のことをカネワー（ワーは豚）といった。現在は豚を殺さないかわりにカネモチというカーシャモチ（餅米を水に浸し、白でついたものを丸めてバシヨウやサニンの葉で包み甌でむした団子風のモチ）を部落でも家々でも作り、それを昔、豚の骨を下げたようにして下げる。すなわち、部落三方所の道の傍らに竹を立てて、その下にダラギ（棘のあるタラノキ）の枝、トベラの枝、ススキの葉を添えてさし、竹にカーシャモチ（実際にはモチは食べて残ったカーサの葉だけ）を掛ける。これは部落に病気などの凶事がおこらぬようにするためという。家々でもカネモチを作り、子供のいる親戚におくる。生まれた年には三つを束にし、次の年には五つ、その次の年には七つを束にして、その束をたくさん子供の部屋の天井に吊るしておいて食べさせる。これを七五三のカネモチといい、子供が丈夫に育つのを祈るためだという。

(3) 大島郡瀬戸内町西阿室⁽³⁾

旧十月のカネサル（庚申）の日は神様の群歩される日で人は山や海に行つてはいけない日と言う。明治三〇年頃まではこの日にシマカタメウシといって一頭を殺した。この牛は部落費で買い、アタリという当番が飼つて、その肉は各戸に配り、そのヒラボネを部落の入り口に吊るした。

ダラギと芭蕉を植え、左ないの縄に牛のヒラボネを下げて垂れた。これは部落のウンキバライ（運氣払い）のためであった。

(4) 大島郡瀬戸内町（加計呂麻島）武名⁽⁴⁾

旧十月の庚の日には明治の終わり頃まではカネワーグア（グアは小さいことを示す接尾語）という小豚を海岸で殺し、部落の子供たちに食べさせた。部落の両方の入り口と、浜からの入り口に、ダラと竹を立て竹から竹へ、カヤの左ないの縄を渡し、それに豚の脛から下の部分を一本ずつ下げた。今は豚は殺さないが、縄は普通りに張っている。これはいろいろの病気などが入らぬようにするためである。病気の流行の時に、臨時にこれと同じことをすることが元はあった。またカネモチといって一〇歳までの子供のいる家では餅を作り、十月の初カノエには三つ、中カノエには五つ、止カノエには七つを縄になつて天井から下げておいて子供に食べさせる。

(5) 大島郡喜界町阿伝・手久津久・荒木⁽⁵⁾

旧六月の初庚の日をハネイーといい、この日これらの部落では一頭の牛を屠つて各戸にその肉を分配し、各家々ではその肉を汁に煮て家内中で汁をのむ。この行事を阿伝ではハラタミー、手久津久ではハダタミー、荒木ではウシガタミーといった。牛を屠る場所はみな部落中央の祭場で、部落民はトベラギの枝に牛の血を塗って持ち帰り、それを門の両側の石垣にさした。また荒木では平骨の一個は部落の東の入口に、もう一個は西の入口に高く吊つた。阿伝では部落背後のヤマンカーという神地に吊つた。手久津久では牛の肉を七片切つて紐でくくり、棒に吊り下げて部落中央のメンヤンツヂという祭場に飾つた。このイワイジシは野犬も怖れて食わなかった。ハラタミーは経費の都合で後には牛の代わりに豚や山

羊を屠るようになった。この行事が行われなくなったのは明治三十年前後だという。

(6) 沖縄・糸満町喜屋武

マークサラウガンは旧三月に行う。日取りはタキムトの仲間さんが決めて部落民に知らせる。部落から頭割りで牛を買う金を徴収し、買った牛はマーチューモーでつぶし、骨を左繩に結び、島ンアガリ、島ンメエ、ハンタビラの三ヶ所に吊り下げる。肉は各戸に分配する。子供たちは牛の血をジークンの葉につけて家の門に下げる。神人はその日の午後、六〇歳以上の男の人たちと共に牛の臓物を煮て部落の要所要所に供えて村の厄ばらいをする。

2 臨時の防災儀礼……すゝめ祓、家内安全の祓、呪咀

(1) 『南島雑話』補遺篇(名越左源太・一八五〇・嘉永三)

大和浜の能呂久米のすゝめ祓の祭文、又家内安全の祓に唱祭文に曰く。将来の御神かなし、国の神かなし、島の神かなし、みまふらたばれと、らやわちみまふらち、しみしよれは、たをれもんなか、なしやりかなしや。わもんなはこせんをとや稲かり、とちやはたをり、かねありみしよふしは、よめたやありよらん。ゑやみくさくこふに、きんなげをとまかなしやれ、とちもかなしやれとらわせ、神かなし、御まぶちたばれと、ふくかなしとふかなし。

□□め祓牛骨附肉は、村中喰忌す。其祭詞みまふらちみしより、将来かなし、国が神かなし、鳥が神かなし、はこ草ましものたち、ものししことこふに、はんなげくんみしよれ。

(2) 『南島雑話』補遺篇(名越左源太・一八五〇・嘉永三)

呪咀 親の子にたゝると云、舅姪にたゝると云ふ甚だしき雑説あり。其災祓には、牛・馬・豚・家鶏・羊を殺分に限りて、村を賑わせば、おのづからたゝり去ると云ふ。

(3) 沖縄永良部島畦布

フジキ山、カサ山、ヤナ山のような聖地に寄つたり、知らずして立ち入つたりした場合には、ユタを頼んで豚を殺して竹かごに豚肉を入れてお祈りをした。これをハネデイといった。

(4) 沖縄永良部島黒貫

フジキ山に行くとき病気になると言つて、豚を部落内で殺し、ユタを頼み、ユタは、耳、尾、口、鼻を切つてあぶり、これをフジキ山に向かつてまき残りの豚肉は、みんなで食べた。

3 臨時の防災儀礼……流行病排除

(1) 名瀬市有良

いろいろの伝染病・赤痢・疱瘡・風邪などが流行するとき、部落入口と家の門に左繩を張る。現在はほとんどやらなくなった。明治のはじめまでは、このとき部落の入口の繩には牛・豚を殺してその頭の骨や足の骨を下げていた。この時は部落の中でホラ貝を吹いて病気を追つた。これをキトウアソビといった。

(2) 大島郡笠利町佐仁

明治一〇年頃までは疱瘡などの伝染病がはやると、部落で牛を殺してその足の骨を左繩に吊り下げたものを部落入口の道の上に横に張つた。そのにおいをきらつて病気が入つてこないと言つた。

(3) 沖縄・与那城村伊計島

イリガサ（ハシカ）が流行してくると区長やノロが部落でもっとも清潔な家を選んでイリガサの神をもてなす宿として供え物などして祀る。流行期もおさまった頃に、部落で一頭の豚を屠り、その頭を浜に供え、部落全員で三味線に合わせて歌をうたい、イリガサの神を海の方にお見送りする。

4 臨時の防災儀礼……病氣平癒

(1) 『南島雑話』 第二篇（名越左源太・一八五〇・嘉永三）

先第一家内に病者あれば、医師は次として直ちにユタを頼んで咒をすれば、ユタいへるには、此病何々の障ありて何等を取り殺すべしとのこととなり、依て豚を殺し身替に立てずば、病快気すべからずと云へば、愚民驚きて其意に同じ豚を殺し、一家親類を呼んで振舞、片はユタに礼物として遺す事なり云々

(2) 大島郡瀬戸内町請島⁽¹²⁾

請島でも病人が出たときユタはヤクバレというのをさせた。ヤクバレの時は、身代わりとして動物を殺した。動物は、馬、牛、豚、山羊、鶏などであつて、その家の経済状態によつた。病人の家では、ユタの指示によつてヤクバレをするが、まず、庭の表に大鍋をすえるカマドが準備され、動物が庭先に引いてこられる。この動物にユタが白衣を着せ、先端を白布でしばつてある三〇センチ位の竹棒の先で、その動物の頭をつきながら呪詞を唱える。この呪詞はとても長いものであつた。そして動物を殺し、大鍋で煮る。

5 臨時の防災儀礼……葬送

(1) 大島郡瀬戸内町与路島⁽¹³⁾

人の死後、ミズノトが廻つてくる日にユタはミツタテという死霊を呼んで話をさせる祭りをした。(略) 庭の表に大鍋をすえるカマドをつくつて、山羊を殺して、煮る。そして、家のヤーゲグチに一メートル位の棒を二本立てて、これにムシロを下げ、これに山羊の頭骨の鼻の穴にひもを通したのと、足を四本と米五合を袋に入れてぶら下げる。ユタは、(略) 家の内側から表に面して座り、ススキやみかんの枝を手に持つて、呪詞を唱え、神がかりして死霊を呼び、死霊の口を語り、死霊を後生に送る。(略) この日は、家の内外を新しくするといい、海岸から白砂を運んできて、敷きつめたりする。山羊の肉は、塩だきで、そのミツタテの夜までに後に残さないで全部処分すべきだといひ、全部をなんらかの方法で食べつくすものであつた。

(2) 沖繩・宮古島諸島⁽¹⁴⁾

当地でも死者の長老たる格にあつて、老死したる場合、「ダヒワー」といふ、豚を殺して共食するといふ「いけにえ」と、「共食」の二通りの儀礼があつた。「ダヒワー」について、里や親戚の女たちが料理し、骨は骨、「血いりちい」と呼ぶ血や、肉や骨入りのスープなど、また、塩のみの味で煮炊きした、三枚肉の皿、等々の献立の変化はともかく、数々に盛られ、死者に供養し、泣きながら食べた。

6 臨時の防災儀礼……新築

(1) 大島郡徳之島⁽¹⁵⁾

家新築の場合は其家に於て祭りをなす。これを「やぎゆし」といふ。この時家主は牛を殺し、その片股と頭を庭前に吊して祭る。而して祭り

終らば之をノ口に献ずるものなり。その残りの肉は当日祭りに集まりし人にて之を食いつくすを常例とす。

(2) 大島郡沖永良部島⁽¹⁶⁾

新築の際、柱が全部立った時にハヤタテエ(柱立祝)という小宴を行った。この時に鶏を料理する慣例であるが、鶏を屠る時にはまず肉冠を刃物で傷つけて血を出し、その血を四隅の柱に塗った。これは妖魔退治の呪法である。

7 臨時の防災儀礼……火災

(1) 『南島雑話』補遺篇(名越左源太・一八五〇・嘉永三)

ノロクメ祓凶 薄葉もち

自ら誤て火を出し、隣家に及べば、ノロクメ共、祭をなし、火を出せし者トガヲトシと云て、牛一疋を火出せし者村中を牽回り、后に牛を殺し、村中の人ふるまふ事なり。火を出せしもの、首させし草をまとひ、牛の首にも其草をまとふ。



(2) 大島郡宇検村阿室

大正五年の大火の時に、火を出した家の者に風呂敷を被せて、ウワントネ(上のトネヤ)から浜まで村中を牛を牽き廻させた。村の辻々では、青年たちが牛を棒で叩き、浜まで牽き出したところで叩き殺して料理し、村中で食べ尽くしたという。

8 臨時の防災儀礼……水害

(1) 名瀬市西中勝⁽¹⁷⁾

昔、九月九日に大雨による山津波でひどい災害をうけたので戦前まではこの日には部落で豚を殺してその肉を食べ、その頭の骨を部落入口に高く左縄で吊して祭をしていた。

以上が、山下・小野両氏の資料を中心とした奄美・沖縄の動物供犠の事例の概略である。これらの事例から幾つかの特徴が指摘できるが、それは後段の考察の項に譲るとして、次に、ラオス・タイ北部のアカ族の動物供犠の事例と、ラオス北部のその他の民族の動物供犠の事例とを紹介したい。

なお、事例中に入っている時刻の表記は、一九九九年五月に行われた現地時刻を表す。

三 ラオス・タイ北部のアカ族の事例

1 歳時行事の防災儀礼

(1) ラオス・ルアンナムタ県・パイヤロアン村

ウネネオ……ホス・ザベエ(新しい年の始まる前に食べる祭)

一四・〇〇 床下の踏み白でホトム(餅)を数軒寄り合つて搗く。

途中で黒胡麻を餅の中に搗き込んでいく。搗き上がった順に取り上げ、頭にかづいてそれぞれの家に持ち帰る。女主人と家にすむ女たちが囲炉裏のそばで餅を丸める。まず、ホトンガマ(餅のお母さん)という大きな餅を作り、ガンマ(浅底平箆)の中央に置く。次に、アペポロ(家の神)に供える小さな餅を二個作る。その後五、六センチくらいの餅を丸める。

肉とを一口ずつ食べさせてくれる。これが済んだのでこれ以降は家の中



村長の家に立つジャレジャッハウ

れると、アカ族の民族衣装を着けてはいる。ドラが叩き鳴らされる。先祖の霊に食べてくださいという合図であるという。
一六・〇二 我々も家の中に呼び入れられ、男主人が餅と鶏の

一五・五七

外にいた主人の弟をはじめ家族が家の中に呼び入れら



丸められたホトン

に枝葉が残してある)の準備をする。
ジャレジャッハウ(庭に立てる竹で先端
乗せるための供物台)作りや、ジャ
レジャッハウ(竹へぎで輪を作りつなげた物で神
が上り下りする階段を意味するもの)、
ジャレジャッハウ(神への供え物を
では、主人の弟がアペアピウエカジュ
という。その間に家の縁台のところ
日村に入ってきたので中に入れない
来者は前日から滞在しておらずに当
を用いて殴り殺し調理する。我々外
一五・一一 男主人が鶏を持つ

て家の中に入り、囲炉裏のそばで棒

に入って構わないという。

一六・〇六 ジャレジャッハウ立てに移る。竹でドツン(九段の
梯子の模型)を作り、縁台からジャレジャッハウに立て架ける。

一六・〇六 家族が家の中で餅と鶏肉の夕食を始める。

一六・一五 餅がふるまわれる。

一六・二七 本格的にジャレジャッハウを立てる。先端に残された
枝に連結したアペアピウエカジュを結びつけて立てる。垂れ下がったア

ペアピウエカジュの端を、ジャレジャッハウに垂れ掛けていく。先祖の
霊はこれを伝って降りてきて、ご馳走を食べてまた上っていく。
一六・三八 男主人がドラを激しく叩き鳴らす。

一七・一〇 村の別の家にも次々とジャレジャッハウ

が立てられる。合計八軒の家を立てられた。
一九・四〇 他の方々からドラの音が聞こえて来る。アペポロに餅

と鶏肉とお供えし、共食をしているものと思われる。村の広場で男女
の若者たちが集まり、歌を唄いながらバンブーダンスを踊っている。
ウネネオ……ホス・アピユロー

(新しい年の祭)

〇〇・〇〇・〇〇・三〇 鶏が



丸められたジャレ

鳴き、羽をパタパタしながら走り回
り、牛が首の鈴をガランガランと鳴
らしながら走り回っている。よく聞
いていると、若者たちが騒ぎ回っ
ているためであるらしい。女たちが起
き出し、囲炉裏に火を起し糯米を

蒸しにかかる。

一三〇 糯米が蒸し上がる。

一四四 中央の広場で若者たちがドラ、シンバル、竹筒を激しく鳴らしながらバンブーダンスを踊る音が聞こえる。

三三三 ジャレ（しんこ団子）作りが始まる。水に浸した粳米を踏み臼ではたく。あちらこちらの家からも同じ音が聞こえて来る。

三四八 桑が搗き上がる。囲炉裏のそばに運び、ガンマの上で小さく丸めてジャレを作っていく。

四〇六 ミツア（竈）のシューワ（大鍋）に水をいれ、囲炉裏の火を移して湯をわかし始める。

四三〇 ジャレを丸め終わり大鍋に一つ一つ投げ込んでいく。ジュダ（箸）で掻き混ぜる。

四三七 ヌシー（黒胡麻）をラツオン（小型臼）に入れ、ラチュ（小杵）で搗き潰す。

四四四 浮かび上がったきたジャレを掬い上げ、ガンマの上に広げ、ヌシーをまぶす。アペポロ、ジャレジャッグウに供えてからでないと食べられないと高いうちところに載せておく。

四四四 弟の妻がアツウ（鶏の卵）を一個茹でて、ジャレと同じく高いところに保管しておく。

四五六 女主人が雌の鶏を捕まえてきて、背負い籠を伏せてその中に入れる。

五〇五 男主人が起き出してくる。

五一一 中空の細竹の筒を囲炉裏の隅に一本立てて、スプーンで三回水を注ぎ入れる。次に伏せ籠から鶏を取り出して、頭、背中、足の



主人が叩き殺す鶏

順に水を掛けて、木の棒で叩き殺す。羽だけむしり取って、他は羽毛の付いたまま囲炉裏の火で焼いて羽の根をきれいに取り去る。水で洗って解体する。首を切り血を出し、足の両付け根に刀を入れ、次に羽の付け根に刀を入れる。胸を引き裂き内臓を取り出す。内臓を水で洗って、腸の部分だけは火で焼く。骨や肉、内臓を小さく刻む。

五四〇 鍋で塩炊きにする。



アペポロに供えられたジャレと鶏肉

六〇〇 アペポロに鶏の足の椀一椀、ジャレ二椀、水二椀をお供えし、その前男主人が家族全員を座らせ、「旧年中はいろいろとお世話になりました。汚したり、壊したりして失礼なことをしました。それを許してください。今年はいい年でありますように」という意味のお祈りをする。その後、供えた鶏の足の肉とジャレとを混ぜて、少しづつ家族に食べさせる。アペロジェ（アペポロに供える御器）は、すぐに下して粉を入れてあるつぼの中に納めておく。

六・一〇 家族みんなでジャレを食べる。

六・一五 ジャレジャググウに土を盛り、ジャレ三個と茹で卵の皮を供える。「今年は丸いものがよく取れますように」と祈る。その後、茹で卵とジャレとを混ぜて、家族全員に一口ずつ食べさせる。

六・一九 男主人が、一本の竹の串にジャレを九粒付けて、家の階段を上がりきつたところの屋根の裏側に、U字形に曲げて差す。悪い霊が家の中に入らないようにするためである。

ミシヨロ (村を清める祭)

ウネネオの祭の一週間(一三日)後、村の男たちだけで豚一頭、鶏一羽、卵一個を持ってミシヨロ(聖なる森)に行き、豚、鶏を殺して肝臓を見て村の一年間の吉凶を占う。新しいヤグ(祭壇)を作って頭などをお供えして、豚や鶏を食べ尽くしてから村に帰る。

イシヨロホロー (水を清める祭)

イシヨロ(聖なる水場)で水を清めて、オドゴ(新米を食べる祭)の時アベポロの瓢箪に入れておいた種籾をその水で洗う。村で運気の良い人が決められて、その人が豚か鶏を持って畑に行き、ヤチュンコピーという小さな片葺きの小屋を建てて、その前で持っていた動物を殺して祀り、ヤチュンコピーの後に九株の種を蒔き、動物を入れていった竹籠はヤチュンコピーの後に棒を立ててそれに掛けておく。

(2) ラオス・ルアンナムタ県・スイ村

ミシヨロ (村を清める祭)

ウネネオ(新しい年の祭)の一三日後に行う祭である。豚を一頭連れてミシヨロ(聖なる森)に男たちだけで行く。喉に刀を刺して豚を殺し、血を出して塩を加えて凝固しないようにしておく。火を焚いて豚の毛を

焼き、刀でこさいで真つ白にする。

頭を落し、下腹部の皮の部分尻のところまで切り回し、次に胸の方向に切り割り、内臓を引き出し、尿道と直腸が破れないように切り取る。四本の足を外し、胴部を輪切りにして解体を終える。若者たちが長老たちの前に肝臓を持っていくと、長老たちはそれを見ながら村の一年間の運勢を占う。「村の人たちも元気に過ごせる。農作も豊作。しかし、動物



豚を解体、調理する若者

の狩りが不猟になる。」などの運勢が判断される。その間、男たちによって森の中央にある大きな木の下に四本足の祭壇が作られていく。また、豚が料理されていく。広場の脇に大鍋が一つと小鍋が二つ設けられる。大鍋ではチエマジャというおじやを炊く。水をたっぷり入れ、その中に豚の頭、一つに括った肝臓と腹部の三枚肉、小さく刻んだ肉や骨を入れて塩味で炊く。じっくりと炊いて肉



若者を作るサビエ

や骨が煮えてだしが出てきたら、家々から持ち寄ったお米をその中に入れておじやに炊き上げる。いわゆる豚飯である。一つの小鍋では内臓の刻んだものを炒り上げる。もう一つの小鍋では、皮付きの肉を刻んだものを炒り上げる。これを熱いうちに取り出し豚の生血を混ぜたものがポワッ

デウという料理である。さらに、生肉をミンチにしてハーブになる草の葉や木の皮を叩き込み、それに豚の生血を混ぜたサビエというものを作る。祭壇には、ダレという六つ目編の竹の作りもので豚の生血が塗付けられた悪魔除け、ナチナツアという竹へぎの輪を連結した悪魔除け、ポロという水入れ用の竹筒、カチーという竹籠（この世で最初に牛の餌として植えられた草を入れる）などが



長老たちが祈りをするヤグ

が供えられる。それが終わると長老たちが豚の頭の肉をちぎって食べながら焼酎を飲みだす。若い者たちによつて長老たちの前に豚の料理が運ばれ食事が始まる。長老たちの食事に続いて村人たちも食事を始める。豚肉を喰い尽くすまではミシヨロから村に帰ってはならない。

取り付けられ、三色の布三枚、かわらけ三枚、紙幣三枚、たばこ三本、焼酎三杯、さとうきび三本、バナナ三本などを供える。さらに、周囲の木の前にも生血の付けられたダレが打ち付けられる。それが終わると、チエマジャの大鍋から頭を取り出し、祭壇の前に供え、長老たちがお祈りを唱えながら頭の肉をちぎり祭壇に供えていく。さらに、祭壇にサビエ

(3) タイ・チェンライ県センチュロンカウ村(アカ族)
チエスジャ(チエヌユとも言い新米を食べる儀式)

早朝(太陽の出る前)にヤチュコピーの九株のうちから三本の穂を

摘み、バナナの葉で包み、アペポロ(家の神)の所の竹筒の中に入れておくか、壁に刺し掛けておく。このとき、畑の稲も少々刈りとって帰る。家に帰ってきたら、チエニヨ(焼米)を作る。畑から刈り取った稲は、まだ中身が固まっていけないので鍋で炒って、冷たくして固まるのを待つて踏み臼で搗いて、バナナの葉に包んで祝いに来た人に配る。籾殻は、バナナの葉に包んで遠くの山に捨てる。また家では鶏を一羽(裕福な人は豚一頭)を殺して食べる。昔は、御飯にする米が足りなくなったときは、エホジャ(だれにも見つからないように食べるの意味)と言って、稲を刈り取ってきて、囲炉裏の上に干して、搗いて食べていた。これは、籾の中身が固まっていけないものもあり、籾殻を取ることができないので行う方法である。

ブピエ(刈り上げの儀式)

今日で稲刈りが終わるといふ日、畑にいくときには、鶏の卵、ロツポ



ヤチュコピーの脇の小屋

(お茶)、ヂバチュウ(焼酎をいれた竹筒で、鹿児島や九州山地のカケケリに似たもの)、御飯を持参して行く。途中のロツコン(村の入り口の門)の左側に鶏の卵、ロツポ、ヂバチュウの一部を、右側に御飯の一部を供えて畑に向かう。刈り取りの前に、ヤチュコピーの後の九株の稲の各株に、持参してきたものを取り付ける。つぎにその上の部分を刈り取って、ヤチュコピーの屋根の上に置き、

チエカアピユベール（種蒔き）をしたときに鶏を入れた籠も屋根の上に乗せる。畑の稲刈りが全部終わったらヤチュコピールの前面の横木の片方を柱から外して地面に置く。畑から帰るときは、畑に残っている籾を取ってきて、家のチエゲ（高倉）、チヂシマウゴン（種籾の高倉）に三回投げつける。チヂシマウゴンの中の壺に九株の稲穂を入れる。壺の中には鶏の卵が入っているが、それが割れているときにはこのときに取り替える。

イシヨロ（水場を清める儀礼）

種蒔きをする一週間（一三日）前にイシヨロの祭をする。アボジユマは、自分の家のチヂシマウゴンの種籾をイシヨロ（聖なる泉）に持って行って水に浸け、鶏を殺してその血を種籾に掛け泉に流して、肉を煮て食べる。その後、種籾を家に持って帰り、アペポロの種籾と混ぜる。

チエカアピユベール（種蒔きの儀礼）

イシヨロの祭の一週間ぐらい後にチエカアピユベール（種蒔き）の祭をする。畑に行き作小屋の脇にヤチュンコピローを建てる。その後側に九株の種を蒔く。

(4) ラオス・ルアンナムタ県ヤール村

チエウドゴ（籾種を取る儀礼）

コピジョンの後側の籾を取って帰り、アペポロ（家の神）に供える。この日は、また新米を食べる祭でもある。畑の籾を取ってきて、鍋で炒つて臼で搗いてチエンニョジャ（焼米）を作って食べる。その籾殻は、豚に食べさせないように遠くの山に持って行って捨てる。この祭をする前にはチエンニョジャは作って食べられない。そのため、お米の切れた家ではこの祭を早めて行う。

ブユピエ（刈り上げの儀礼）

稲刈りが全部終わるといふ日にブユピエの祭を行う。先ず、九株を刈



家屋と離れて立つチヂマゴン

り取って、コピジョンの屋根の上に刺し掛けておく。その後鶏を殺して、その肉を供え、血を供え、畑の神様に罪にならないようにと、血を撒いた。稲刈りが全部終わったから、九株の稲穂を家に持ち帰り、チヂマゴンの壺の中に入れる。壺の中の卵が割れていなければそのまま、もし割れていたらこのときに取り替える。

エカアペロー（種蒔きの祭）

畑の作小屋の脇に片葺屋根のコピジョンという小さな小屋を建てて、ジユマがコピジョンの後側に、チヂマゴンとアペポロの中の種籾を混ぜた籾を九株蒔いたり、周囲に蒔いたりする。

(5) ラオス・ルアンナムタ県ソイ村

ホスジャ（新米を食べる儀式）

稲刈りの前に良い日を決めて、新米の祭であるホスジャの祭をする。ヤチュコピールの後側の九株の籾の三本を摘んで家に持って帰り、アペポロに上げる。この時、畑の籾の籾を両手一掬いぐらい取ってきて、チエンニョ（焼米）を作って食べる。籾を鍋で炒つて臼で搗いて、バナナの葉に包んで、普通の米とは混ぜないで蒸して、隣の長老を二〜三人招



焼畑に作られたヤチュコピロー（スノーマイ村）

いて、鶏を殺してごちそうをする。この祭以前に稲を刈りとつて食べると口が曲がると言われる。

(6) ラオス・ポンサリール県スノーマイ村

ヤチュコピロー（畑、種籾を清浄にする儀式）

ヤチュン（畑の作小屋）の隣にヤチュコピローを建てる。茅屋根の片葺の小さな小屋である。又木二本を柱として立て、それに横木を一本渡

して、桝三本を立て掛け、地面に接した側にも横木を渡し屋根を作り、茅で片屋根を葺く。家から持参してきた鶏一羽を殺して、その鶏を入れてきた籠を、ヤチュコピローの後側に立てた竹の棒の先に取り付ける。殺した鶏の羽三本を刺す。ヤチュコピローの後側に三列、九株の種籾を植える。後に立てた籠に鶏の肉や食べ物を供えて、稲がよく取れますようにとお祈りして、鶏を煮て食べる。

(7) ラオス・ポンサリール県ピッジエマイ村

ヤチュンコピロー（畑を清める儀式）



ヤチュンコピローに出かける村人（ピッジエマイ村）

畑を清める儀式及び種蒔きの祭であるヤチュンコピローの祭をする。卵、鶏一羽、茅屋根を準備して畑に持って行く。ヤチュンコピローという小さな片葺の小屋を建てて、種蒔きをする。ヤエヤム（閉経後男になる儀礼）の済んだ女性が白いスカートをはいて種蒔きをする。

2 臨時の防災儀礼……流行病排除

(1) ラオス・ルアンナムタ県・パイヤロアン村

アクウトートの祭り



村から引き出された白黒の犬

ウネネオのホスザベエの祭を行うという日であるが、隣の村に病気が流行ってきたので、村に病気が入らないように犬を殺して食べる祭をするという。この日に村のロツコーン（入口と出口に作られた村の門）から中に入ったら再び村からは出られないという。村の男たちが腰に鉈を下げ、村長の家の白と黒の混じった犬を牽き、燭台やまな板を持って村から下りてくる。

村の境の橋を渡った所に止まる。門を建てる位置を決める。道の両脇にそれぞれ二本ずつ四本の柱が建てられる。村の側を低く、村の外側を高くしてあり、梁が横に渡され、垂木が縦に掛けられ固定される。近くから取ってきた茅で左ないの縄が作られ村の外側の梁に掛け渡される。竹へぎで作られ連結された竹の輪が同じように掛けられる。さらに、カー（山生姜）を左ないにして掛ける。また、ダレ（六つ目編みの竹編み）



川の外に立つ門(ソイ村)

の大きいものを村に向かって左側の柱に打ち付ける。さらに、ダレロ(ダレを九枚重ねて編んだもの)を外側の梁の中央の下側と左の柱に打ち付ける。次に、村長が左の柱の下に中空の竹筒を立てて、その中に竹の串と中空の細竹を入れ、水を竹筒の中に三回注ぎ入れる。村人の一人が柱の根本に犬を牽いてきて木の棒で殴り殺し、血を取り出す。次に、村長が犬の尻、腹、肩の順に竹筒の水を三回ずつ掛けていき、同じ部分の毛を一回抜いては、祈りの唱詞を唱えながら竹筒の根本に落していく。犬の皮を剥ぎ、頭の部分だけを残り



村の外に齒をむく犬と門

して肉を取り出す。手足、背筋を伸ばした形に張り付けにし、口を大きく開けさせた形にして、門の上に村の外側を向けて取り付ける。こうしておくと村に入ろうとする病気に吠え掛かり追い払うのだという。肉はみんなで食べ尽くしてから村に帰る。

(2) ラオス・ルアンナムタ県・ソイ村

アクウトートー(犬の祭)

村の中に豚の病気が流行って死ん

だので、病気が村に侵入して来ないように、川を渡った村の入口に門を立てて、犬を殺して皮を剥ぎ、口を開けて齒をむき出しにし、村の外に向かって貼り付けにした。また、門は田圃に行く道の入口と山に行く道の入口にも立て、尻尾と性器とを下げる。犬の肉はその場で村人全員で食べ尽くす。犬は、ワンワンと吠え立てて、悪いものを追い払い寄せ付けないからこの祭をするのだという。

2 臨時の防災儀礼……呪咀

(1) ラオス・ルアンナムタ県・ナムレツ村

ミシヨロは女性や子どもは入ってはいけない神聖な場所であり、男であつても木を伐ることはもちろん枝を折ることさえ禁じられた場所である。この禁を破った者が出たら、その者から村に豚一頭を提出させて、ミシヨロで殺して村人たちで食べ尽くしてしまう。

3 臨時の防災儀礼……葬送

(1) ラオス・ポンサリー県・ムチバンカ村



人形の根本の水牛の頭骨

村の長老が死ぬと水牛を殺して村人で喰い尽くしてしまい、その頭は墓の人形の根本に置いておく。墓は、埋めた上を盛り土にし、そのうえに家を建て、梯子を掛け、生前に使っていた生活道具を入れる。その脇に

大きな人形を立て、生前着ていた民族衣装を付けさせて生前の姿をかたどっている。その根本に墓を訪れる人を脅かすかのように置いてある。

4 臨時の防災儀礼……婚姻

(1) ラオス・ルアンナムタ県・パイヤロアン村

カベドウ……花嫁の家での儀式(花嫁、花婿ともに一八歳の結婚)

儀式の当日の午前中に豚一頭を殺し、血を抜き、熱湯を掛けて毛や垢を落して解体する。ほとんどが男の若者たちだけの手で、セビエ(生血



セビエに木の皮を刻み込む若者

に混ぜた肉のミンチ)、セトチャ

(炒り揚げた肉のミンチ) チュマジャ

(肉と肉汁に米を炊き込んだ豚飯)、

マルオチュ(バナナの葉に包んで蒸

し焼きにした肉のミンチ)、ホジュ

チャ(麵のスープ)、ヌチャラー

(カボチャとキャベツのスープ)な

どを作る。正午前になり新郎側の人々

も新婦の家に集まり、料理も配膳さ

れる。アペポロの前の円卓にアペポ

ロを背にして父親とヨモ(結婚式全

体を通して司祭する女性)、その右手に母親と新婦、正面に伯母に(父の兄の妻)座り、その向い側(囲炉裏の脇)に女性たちが座る。新婦たちの円卓の左隣の円卓に長老たちと村の外からの客人たち、その向い側(家の入り口近く)に男の若者たちが陣取る。

一一三〇〇 新婦の頭飾りの後側に既婚を表す竹製の円板を取り付け

る。次に、父親が御飯を一口新婦に食べさせ、父親も一口食べる。さらに、ヨモ、伯母にも順に一口ずつ食べさせる。

一一三〇六 花嫁が屋外に退出する。

一一三〇一 村長も来て男たちの祝宴が始まる。

一一三四四 母親が泣きだし、それにつれて父親も泣きだし切ない声で歌を歌い始める。それを合図にお茶が出される。父親の歌の内容は「生まれた時から一緒に暮らしてきたので別れたくはないが、女性は自分の家を別に持たなければならぬから仕方がない」とか、「この娘は一度も叩いたりせず大事に育てたのに、向こうの家に行つたらいじめられるかもしれない」とかという娘に対する切々たる思いである。それを聞いて周りの親戚の女たちも泣いている。若い青年二人と新郎が料理を追加して回る給仕役に徹している。

一一三〇五 女性たちが食事を始める。

一一三一八 父親の歌が止む。

一一三三五 新郎が焼酎を、新婦

がコップを載せたお盆を持って、父

親、ヨモ、母、伯母の前に膝まずき、

焼酎を差し上げる。コップを受けた

人は、それぞれ新婦にこれからの新

しい生活についての助言をする。新

郎・新婦は長老、若者、女性たちの

順に次々と客の間を注いで回る。コッ

プを受けた人は、祝い金を上げてい

ろいろ語りかけ、やがて焼酎を飲む。



村長に焼酎をさす花嫁と花婿

中に一人の若者が歌で語りかけ、歌が数分間におよびついに泣きだし、花嫁も泣き出してしまふ。その若者が焼酎をのみ乾すと、周りの若者たちがホイイと大声で囃子立てる。その男の歌はその後もずっと続く。

一四・〇〇 新郎新婦の焼酎上げが終わり、笠が運び込まれ掛け紐が付けられる。若者の歌が途切れると、周りの若者たちから歌を請求する囃子の声が掛けられる。新郎は途中で退席しその場からいなくなる。

一四・四四 若者たちが長老たちの方へ歌を渡そうとするが押し戻される。そうしたやり取りのあと長老側から歌が返されると若者たちが大喜びする。

一四・五〇 父親から新婦に銀の腕輪が贈られ、古いものを取り替える。

一四・五九 一人の若者が太鼓を持ってきて、若者たちの合唱が始まる。長老たちはそれに構わず歌い続けている。

一五・二五 新郎が尋ねてきてすぐに消える。

一五・三五 再々度新郎がやって来る。新婦に持たせる肩掛けのカバンを女性たちが縫い終わる。

一五・三六 父親がまた歌い始める。長老たちから若者たちにそろそろ静かにするように注意が出るが、若者たちは一向に静まらない。

一五・四四 女性たちが若者たちに静まるように迫るが酔払っていて聞かない。長老たちも若者たちに迫る。

一五・四五 若者の一人が出ていこうと皆を誘い立ち去る。

一五・四七 父が泣き出す。新しく作ったカバンに母親がピマ(白いスカート)を入れる。

一五・四八 新婦にピマをはかせる。ジャマ(前後の裾に三角紋の

入った貫頭衣)を着せる。ナチという飾りを頭飾りから胸の前に垂らす。皆がすすり泣きをしている。花嫁も泣き、新郎は焼酎瓶と杯を持って立っている。花嫁の頭に黒い布を被らせ、そのうえから笠を被らせる。父親は泣き続けている。

一五・五八 新郎の父親代わりの叔父、新婦、新郎、ヨマの順で新婦の家を出立し、走るようにして新郎の家に向かう。新婦の親戚関係の人はだれも付いてこない。

ジェチエバラ(花婿の家での儀式)

一六・〇〇 新郎の家に到着する。階段を上がり、ヨモが家の入り口の前で新婦の髪を切り、新婦の足、手の順序で水を掛ける。笠を脱がせて家の中に入らせる。入り口から向かって左の部屋に、新婦を壁側に向けて座らせ、新郎は新婦と背中合わせに座らせる。



背中合わせの新婚夫婦とヨモ

一六・〇五 二人の横にヨモが

座る。前の円卓に茹で卵二つを載せた白御飯が置かれている。ヨモが茹で卵の一つの皮を剥き、花嫁に一口、次ぎに花婿にも一口、ヨモも一口食べる。次ぎに、花嫁、花婿の順に焼酎を二回ずつ飲ませ、ヨモも指に付け二回なめる。さらに、ヨモが残り卵を取り、花婿の右手に渡す。花婿は後手で花嫁の右手に渡し、花嫁は左手に握り替えて後手で花婿の左手に渡す。さらにもう一回同じことを繰り返す。



叔父がヨコヨを叩き殺す

次に、ヨモがその卵を受け取り、皮を剥いて花嫁に一口、花婿に一口、ヨモが一口、父親役の叔父と母親役の叔母に一口ずつ、残りは子どもたちに食べさせる。

父親役の叔父が、ヒヨコを水で清めて、棍棒で打ち殺し、囲炉裏の火で焼いて解体する。米に塩を加え、ヒヨコの肉とを一緒に鍋に入れて煮る。叔父は、囲炉裏の脇に立てた竹の水筒から水を取りだし、煮えたヒ

ヨコの肉に掛ける。ヨモの前の円卓にヒヨコの肉、白御飯、茶碗、お湯、花嫁に一口、ヨモも一口食べる。ヒヨコの肉に箸を付けて、花婿の口に三回、ヨモが三回、花嫁の口に三回付けてやる。

一六・三五 終了。

一六・四五 新郎新婦はそのまま

座ったままで、右と左の部屋を分ける敷居の上で豚を殺す。ヒヨコを清めた囲炉裏に立てた竹の水筒の水で、後足、腹、咽喉の順に清めて咽



叔父とヨモが占いを看る

喉を刺して殺し血を取る。

一六・五〇 花婿が席を立つ。

一六・五七 ヨモと叔父がサッセホ（肝臓）を見ながら占いを看る。

一七・〇三 終了。この家の屋根のタルキの括り方が悪いという占いが出て、リエハロパ（割り竹）を、四面の屋根裏にを取り付ける。これで補強したことになるのだという。

一七・〇五 花嫁が席を立ちピマヤジュマを取り去る。

二〇・一五 花嫁は壁を向き、花婿は客の方を向いて座る。ヨモがサッセホを千切りにし、水に付けて花婿に食べさせ、同じものを花婿に手渡し、花婿が花嫁に食べさせる。次に、サビエを最初に、準備された御馳走を花婿、花嫁の順に箸に付けて二回ずつなめさせる。次に、ヨモも同じことを繰り返す。花婿が酒を飲む。ヨモも飲む。ヨモがスプーンですべての料理を口にし、お茶を飲み、その後他の女たちもお茶を飲み始める。

二〇・三三 花婿が席を立つ。ヨモと八人の男たちの前のテーブルにフマチュウ（竹筒に差した豚骨）が配られる。これが食べられる間は皆黙って座っている。これが食べられて初めて皆の食事が許される。

四 ラオス北部のその他の民族の動物供犠

1 歳時行事の防災儀礼

(1) ルアンパバーン県ロンラオ村（モン族）

一九九八年一月八日は、正月の前日に当たる日であった（従って一月九日が正月）。この日は、家々では豚を殺し、餅を搗く。モン族の家



タータイに供えられた豚の頭

の神であるタータイは、正面入り口に
対面する壁の中央部分に祀ってあ
る。その入り口から屋根裏を伝って、
三枚の白い布や三筋の糸がタータイ
まで渡されている。家の主人が入り
口で招いた正月の神が、この白い布
や糸を伝ってタータイの所に着くの
だという。

殺す豚は、この日のために各家で
飼育していたもので、四本の足を括
り、咽喉を刀で刺し、血を抜く方法
を取る。積み上げた木に火をつけ、その上で毛を焼き、山刀を使って皮
の汚れを落としていく。

解体が終わると、頭と骨付きの枝肉をタータイの前にお供えする。中
でも頭は正月三日間お供えしておくという。豚を殺した夜は、トンプア
イと呼ぶ豚骨料理を炊いて食べる。大鍋にツッター（肋骨）、ガータオ
（背骨）などの骨付き肉とゾンツァー（内臓）と高菜とを塩味で炊く。
この村のモン族の人々は、この夜トンプアイを食べないと正月が来ない
という意識を強く持っている。

また、タータイの横の壁には豚の古くなった下顎が幾つも掛けられて
いる。

2 臨時の防災儀礼……病気排除

(1) ラオス・ウドムサイ県・フェーフン村（カム族）



村の入口に立つパトツウー

村の中で誰彼となく
病気になった時、村の
入口と出口にパトツウー
（門）を立てる。道の
両脇に一本ずつ杭を打
ち、それにそれぞれ竹
の竿を立て、さらにそ
の間に人の目の高さ

竹の梁を渡す。竿の先にはコロスイーと呼ばれる削り掛けを削り出す。
これは、悪いものを追い払う力を持っているという。梁の上にはタレオ
と呼ばれる竹の矢来が組まれ、村に人が出入りできないようにする。こ
れが新しいときは外から村に入れない。また、竹の竿には、竹へぎの輪
を連結したものと、竹へぎを鉤の形に組んだガドツパー（魚の骨）が掛
けられている。木の杭の根本には、ダーカンピーと呼ばれる白黒だんだ
ら巻の棒と木の刀の作り物とが差してある。いずれもお化けを払う刀で
あるという。また、根本に木の彫り物の人形が一体ずつ立っている。こ
れを立てて、夕方から四時ごろ、森の中に豚一頭、鶏一羽を連れていき、
そこで殺して食べてしまう。この門にはその血を持ってきて塗りつける。

(2) ラオス・ルアンナムタ県・ホエホーム村

タムピティーパー

妻が病気に罹り病院に連れていっても治らないので、村のラッター
ン（祈祷師）を頼んで鶏を殺して病気を治す儀式をしてもらう。村の境
に祭壇を作る。祭壇の正面と両脇にはタレオ（六つ目編みの竹編み）を
立てる。また、正面に差し渡した梁の両端にはポンペン（水を入れた細



マンとアッイヤラー

これが終わると、みんなでマンやアッイヤラーを食べ尽くして村に帰る。帰りには、悪い霊が追い払われ良い霊が付いた妻の衣類の入っている籠を持ち、祭壇より村側に作られた燃え差しに三本のタレオが立っている上を股いで、唾を吐き掛けて帰る。悪い霊はこの燃え差しより村の外側に置いて帰るのだという。家に

い竹筒)を下げる。祭壇の棚の上には、スングヤッタツ(竹へぎの輪を連結したもの)、グン(霊の形を現す土人形)、妻の身に着けたものを入れた竹籠、チョック(バナナの葉に包んだ芋)、ブイ(お茶の入った竹のコップ)、マン(鶏の内臓にニンニクとねぎを切り刻んで生の血と混ぜたもの)、アッイヤラー(鶏の頭などの骨や肉を刻んで煮たもの)などを置く。ラックーンが祭壇の前に座り、男が脇に立ってトラドン(竹筒の楽器)を叩いてこの場所の霊を呼ぶ。ラックーンは、呪詞を唱えながらグンにマンやアッイヤラー



グンに鶏肉を食べさせるラックーン

を食べさせたり、地面(土地の神様)に食べさせたりする。

帰ったら良い霊の付いた白木綿の糸を妻の手首に巻いてやる。こうすると病気が治り、体に悪い病気が入ってこないという。

(3) ラオス・ルアンナムタ県・ナムルー村(ランテン族)⁽¹⁸⁾

このナムルー村には、キョーン(一本角)を持つヒイコンクという仮面を着けて行う「アイマンロー」、「アイマンチャン」、「アイマンチェン」と呼ばれる仮面の儀式がある。「アイマン」は男の先祖の霊と呪術師の両方の意味を持ち、「ロー」は大きな儀式、「チャン」は中規模、「チェン」は小さな儀式という意味で、供犠する動物の規模によって同じ儀式を呼び分けている。この儀式は、家族が病気になったり、不慮の事故に遭ったときと、誕生した子供の名付けのときに行われる。家族が病気になるとアイマン(呪術師)の所に行って原因の判断を頼むと、「アイマン(先祖の霊)が食べ物欲していて、病気の形で子孫に知らせているのだから、すぐに先祖をお招きして御馳走をせよ。」という。仮面を被りアイマンを務めるアヒコンは二人決まっており、この村の始



ヒイコンクを着けたアイマン

祖の二つの家の三五歳以上の男しかなれない。それぞれ自分の家系のつながる方を頼む。その家では、言われたとおりに豚や山羊、鶏などを殺し、家の神様を祀る神棚の前に供え、頼まれたアヒコンは夜十時ごろ、

家の外で青いズボンに赤い上着を着て、頭に白いバンブーパーを巻

いて、ヒイコンクラーを被りアイマンとなって、神棚の前に入ってくる。待っていた二人のタイマン（司祭者）と三人で儀式をする。アイマンは歌や踊りをして、供えたものを食べると家の外に出ていき、着替えて再び入ってきて家族と一緒に供えられたものを食べる。また、十五歳以下の子どもがいる家では必ず仮面を着けて行う。子どもたちがこの仮面を着けたアイマンを見ると、いいことをしてくれる先祖の霊で、子どもに取り付く悪い霊を追い出すのだと信じているからだと言われる。

また、子供が生まれる一週間ぐらい前になると「アイマンロー」の儀式の準備に入る。儀式の実施は、子どもが誕生したあと三、四日目、準備が間に合わなければ一か月後でもよい。名付けは、神棚に供えた御馳走を食べた後するもので、それ以前に名付けをしてはならない。

こうしてみると、このヒイコンクラーを被ったアイマンが、先祖の霊だと信じられていることは明白である。しかも、自分の欲望のためには時を選ばず、不定期に子孫を病気にする荒ぶる霊であり、もてなしを受けると鎮まり、病気を治し悪い霊を追い出したり、赤子の名付けの場に臨み、もてなしを受けてはじめて子孫の列に加え、守護する善い霊になるという二面性を持っている。

また、出現の時は、呪術師のアイマンによる病気の判示の際と、赤子の名付けの時だけである。決して正月など他の行事に出ることはない。さらに、ヒイコンクラーを付ける人は、アヒコンと呼ばれる特定の二人だけである。

以上が、筆者が確認している現時点でのラオス・タイ北部の動物供犠の事例である。こうして見てくると、山下・小野両氏が論じ、分類してきた奄美・沖縄の事例と極めて強い類似を示していることが理解できる

であろう。

それでは、次にその両地域の事例について細かく比較を試みていきたい。

五 比較の試みと考察

1 殺し食べる場

まず、動物を殺し食べる場の問題について考えてみたい。奄美・沖縄の場合は、山下氏が示したように「歳時習俗」、「建築儀礼」、「葬送儀礼」、「臨時の防災」の場で、いずれも災悪が忍び寄り、日常の秩序が崩れる恐れのある場面である。小野氏が動物供犠のすべてを「防災儀礼」として捉えられたのは、そうした意味で正しかったといえる。

それでは、歳時習俗・年中行事から見えていこう。両氏がとり上げられているのは、奄美の夏正月といわれる究旧八月のアラセツの後にやってくるカネサル（庚申）の日と、旧六月の庚申、三月三日などのシマガタミーや、沖縄の旧二月、三月、八月、二月などに行われるシマクサラである。いづれも恐ろしいものが訪れるといわれる日で、集落内を清浄化し侵入しようとする悪霊を払おうとする日である。こうした意識は、ラオス・ルアンナムタ県・ヤールー村やスイ村などのアカ族のミシヨロ（村を清める祭）やイシヨロ（水を清める祭）などと共通するものである。

さらに、この地域ではこの他にも、アラセツの祭や一二月末にシヨウガツワーと称して豚を殺して豚骨の料理を食べる習俗が知られているのであるが、それについては両氏とも触れられていない。これについては、

筆者は別に触れたことがある。そこでは、年取りの晩から正月の間はもちろんそれ以外にも、危機から脱し再生を図ろうとする祭の場で食べられていることを指摘しておいた。⁽¹⁹⁾

それでは、ラオス・タイ北部ではどうか。ラオス・ルアンナムタム県・パイロアン村のアカ族のウネネオのホス・ザベエ（新しい年の始まる前に食べる祭）やホス・アピユロー（新しい年の祭）の鶏を殺して食べる事例や、ラオス・ルアンパバーン県・ロンラオ村のモン族の正月前日の豚殺しや頭骨供え、豚骨食などは、奄美・沖縄のシウウガツワいや鹿児島年の晩のニワトイノホネンシユイなどとほとんど同じ習俗だといって良く、両者は深くつながるものであるといつて良いであろう。

2 殺し食べる動物

奄美・沖縄の供儀儀礼で殺し食べる動物は、牛、豚、山羊、鶏の四種類で、いずれも家で飼育している家畜である。小野重朗氏は、これらの動物の系譜関係について、「牛から豚へ山羊へ、鶏へ、さらには鶏卵にまで移る傾向が見られること」を指摘されている。

一方、ラオス・タイでは、対象とされる動物は水牛、豚、犬、山羊、鶏であり、かつてはヤチュコピロー（畑、種籾を清浄にする儀式）には山にいる鶏を用いたという伝承もあるが、基本的には家畜である。しかし、これらの動物の間には、小野氏が指摘するような系譜関係は認められない。むしろ、ラオス・ルアンナムタム県・ナムルー村のランテン族のアイマンの儀式の事例が示すように、その規模の大小によって異なる場合がある。ラオス・ポンサラー県・ムチバンカ村の葬送儀礼の水牛の頭骨も、小規模の墓に立つ人形の根本には置いてはなかったのを見ると、

死者の社会的な地位などによって殺す動物が変わると思われる。

また、ラオス・ルアンナムタム県・パイロアン村やスイ村のアカ族のアクウトートー（犬の祭）などのように、悪いものを追い払うという犬の特性と儀式の内容が密接に関わることによって規定される場合とがある。パイロアン村のホス・ザベエ（新しい年の始まる前に食べる祭）やホス・アピユロー（新しい年の祭）の鶏を殺して食べる事例も、鶏と卵であるところに意味があるのである。また、同じ村のジェチエバラ（花婿の家での儀式）におけるヒヨコと卵も同様であろう。

こうしたラオスの事例から改めて奄美・沖縄の事例を見つめなおしてみると、たとえば、同じ『南島雑話』でも「地カタメ」の項では「牛の腰骨又は足骨」、「ノ　ロクメ祓いの図」の項では「牛を殺し」と言い、「呪咀」の項では「其災祓には、牛・馬・豚・家鶏・羊を殺分に限りて」、「咒」の項では「依て豚を殺し身替に立てずば、病快気すべからずと云へば、愚民驚きて其意に同じ豚を殺し」などとあり、供儀の対象動物が必ずしも「牛」に限られているわけではない。大島郡瀬戸内町請島の「ヤクバレ」の事例も「身代わりとして動物を殺した。動物は、馬、牛、豚、山羊、鶏などであつて、その家の経済状態によつた」とあり、固定されていなかった。強いていえば、集落単位など大掛かりな儀礼の場合には牛を対象にしたといったほうが妥当だと言つてよい。従つて、「牛から豚へ山羊へ、鶏へ、さらには鶏卵にまで移る傾向が見られる」とした小野氏の系譜論についても、今一度考え直す余地があると思われる。それでは次に、動物の殺し方の問題について触れてみたい。

3 叩き殺しと供儀

奄美・沖縄の事例で見ると、動物の殺し方について具体的に触れているものは、大島郡宇検村阿室の「村の辻々では、青年たちが牛を棒で叩き、浜まで牽き出したところで叩き殺し」と、大島郡喜界町上嘉鉄の「旧六月カノエの日正午頃からまず餅をつき、ハラタミーヤシドウル（牛を殺す場所）」である東と西の二ヶ所の広場に牛を引き出し、頭を鉞で打って殺し」とあるのみであるが、叩き殺すという事例があつたことがわかる。特に、阿室の事例は集落内を引き回すことによつて、大火をもたらした集落内の悪を牛に寄り付けさせ、それを集落外に引き出し、叩き殺すことで寄り付いた悪を叩き殺すという意識を見出すことができる。つまり、身代わりに殺すという意味で供犠性を認めることができる。

こうした叩き殺しは、ラオスでも見られる。ルアンナムタ県・パイヤロアン村やスイ村のアカ族のアクウトートー（犬の祭）の事例はその代表的な事例である。犬を村から牽き出し川を超えたところで木の棒で殴り殺し、血を取り出すという方法は阿室の事例と同じ意識を見ることが出来る。さらに、同村のウネネオ……ホス・ザベエ（新しい年の始まる前に食べる祭）、ホス・ザベエ（新しい年の始まる前に食べる祭）やジェエバラ（花婿の家での儀式）においても同様に、鶏やヒヨコを叩き殺すことが行われている。刀でのどを刺して殺す方法との間にはどのような差異があるのか明確にはしえないが、叩くことには一定の意味を認めることができよう。次に、殺した動物の食べ方に注目してみたい。

4 血と骨と肉と

奄美・沖縄の事例では、生の血を食べるといふ事例は認められない。しかし、沖縄県宮古島諸島の「ちいりちい」といふ火を通した血入りの

料理を食べていたことがわかる。

ただ、食べはしないが生の血を斎場や村の入り口などに塗つたりする例がある。大島郡喜界町阿伝・手久津久・荒木の旧六月の初庚の日に牛を殺し、「トベラギの枝に牛の血を塗つて持ち帰り、それを門の両側の石垣にさした。また荒木では平骨の一個は部落の東の入口に、もう一個は西の入口に高く吊つた。阿伝では部落背後のヤマンカーという神地に吊つた」といふ事例がそれである。また、沖縄県糸満町喜屋武のマークサラウガンにおける「子供たちは牛の血をジークンの葉につけて家の門に下げる」というのも同様であり、大島郡沖永良部島の新築の際の、ハヤタテエ（柱立祝）で行う「鶏を屠る時にはまず肉冠を刃物で傷つけて血を出し、その血を四隅の柱に塗つた」もそれである。これらは、共通して悪霊を追い払うための呪いである。

一方、ラオスでは、ほとんどすべての事例に共通して生血を食べている。たとえば、ルアンナムタ県・スイ村やヤール村のアカ族のミシヨロ（村を清める祭）では、喉に刀を刺して豚を殺し、血を出して塩を加えて凝固しないようにしておく。皮付きの肉を刻んだものを炒り上げ、これを熱いうちに取り出し豚の生血と混ぜてポワツデウという料理を作る。さらに、生肉をミンチにしてハーブになる草の葉や木の皮を叩き込み、それに豚の生血を混ぜたサビエというものも作る。これらのポワツデやサビエはスープのようにすすつたり、他の食べ物に浸けて食べるが、人々にとっては最も重要な食べ物として認識されている。これは牛を殺したときも、犬、鶏を殺したときも同様に作られ食べられる。

また、同じミシヨロの祭では、ダレという六つ目編の竹の作り物に豚の生血が塗付けられた悪魔除けを、祭壇や周囲の木の幹に打ち付ける。

同じようなことは、ラオス・ウドムサイ県・フェーファン村のカム族の村でも見られる。村の中で誰彼となく病気になった時、村の入口と出口にパトゥー（門）を立てる。これは、悪いものを追い払う力を持っているという。夕方の四時ごろ、森の中に豚一頭、鶏一羽を連れていき、そこで殺して食べてしまい、この門にはその血を持ってきて塗つける。これも悪いものを追い払う力を付け加えようとするものである。

また、奄美・沖繩では、殺した牛や豚の骨に対する関心が高いことが特徴である。『南島雑話』の「地カタメ」の項の「村はずれの木に凶のごとく牛の腰骨又は足骨をさげ置く」や沖繩・糸満町喜屋武のマークサラウガンの「牛はマーチューモーでつぶし、骨を左繩に結び、島ンアガリ、島ンメエ、ハンタビラの三ヶ所に吊り下げる」などに見られるように、殺した動物の骨を村の出入り口に下げて、悪霊の侵入を防ごうとすることが認められる。

ラオスでも骨、なかんずく頭骨に対する関心が高い。たとえば、ルアンナムタ県・スイ村やヤルー村のアカ族のミシヨロ（村を清める祭）では、豚の頭骨やその肉を祭壇に供えたり、食べたりする。食べ終えた頭骨は祭壇に掛けておく。また、ラオス・ポンサリイ県・ムチバンカ村では、村の長老が死ぬと水牛を殺して村人で喰い尽くしてしまい、その頭はお墓の人形の根本に墓を訪れる人を脅かすかのように置いてある。さらに、ルアンパバーン県ロンラオ村のモン族は、正月の前日に豚を殺すが、解体が終わると、頭と骨付きの枝肉をタータイ（家の神）の前にお供えする。中でも頭は正月三日間お供えしておく。豚を殺した夜は、トンプアイと呼ぶ豚骨料理を炊いて食べる。大鍋にツツター（肋骨）、ガータオ（背骨）などの骨付き肉とゾンヅァー（内臓）と高菜とを塩味

で炊く。この村のモン族の人々は、この夜トンプアイを食べないと正月が来ないという意識を強く持っている。また、タータイの横の壁には豚の古くなった下顎が幾つも掛けられている。このように、骨付きの肉を神に供え、食べ、その骨を悪霊祓いに掛け置くことが見られ、奄美・沖繩の意識に通じるものがある。

さらに、今ひとつ指摘しておかなければならないことがある。それは、『南島雑話』の「地カタメ」の項の「其肉は村中男女悉く喰」とか、「すすめ祓」の項の「□□め祓牛骨附肉は、村中喰忌す」とあるように、その肉を食い尽くさなければならぬとする意識が強く認められることである。

こうした意識は、ラオスの場合も同様である。ルアンナムタ県・スイ村やヤルー村のアカ族のミシヨロ（村を清める祭）では、殺した豚をすべて食べ尽くさなければ、ミシヨロの森から出て村に帰ることは許されない。同じく、ルアンナムタ県・パイヤロアン村やスイ村のアカ族のアクウトートー（犬の祭）でも、犬の肉を食い尽くさなければその場を離れてはならないのである。

このことは、動物供犠の重要な要件であると思われる、奄美・沖繩の事例もこうした文脈で理解していくことが必要である。

六 おわりに―動物供犠比較の可能性

以上、奄美・沖繩の動物供犠とラオス・タイ北部の山岳地帯に住む少数民族の動物供犠の比較を行ってきたが、まだ未調査の建築儀礼に関する事例を除けば、極めて密接なつながりが確認できる。

しかし、異なる点がないわけではない。たとえば、山下欣一氏が奄美・

沖繩の事例で提示された「葬送儀礼に関する事例」という分類は、ラオスでは「人生儀礼」という枠で捉えることが必要であると思われる。

また、奄美・沖繩の事例では、ノロやユタという女性を中心としたシャーマンが行っているのに対し、ラオス・タイでは男性のシャーマンが中心であり、アカ族のヤチュンコピロー（畑を清める儀式）に関わる女性もヤエヤム（閉経後男になる儀礼）を済ませた女性であり、男性という意識が強く認められる。こうした差異も含めて、さらなる検討を加えていかなければならない。

それにしても、日本列島の中では極めて違和感を持たれるこうした動物供犠の習俗が、ラオス・タイ北部の山岳地帯に住む少数民族の文化の視点で捉えていくことで、環シナ海の広がりと同様性を持つ習俗であることがわかる。つまり、奄美・沖繩の文化が「日本」の枠を越えて、多くの少数民族の文化と対応し、つながることが見えてくる。このことは、「日本文化」を多民族文化として論じていく上で、奄美・沖繩の地域の文化が大きな力を持っている可能性を予感させるのである。

〔注〕

- (1) 川野和昭「ラオスの少数民族の暮らしと文化―南九州との比較から―」、『黎明館企画特別展 海上の道―鹿児島文化の源流をさぐる―』鹿児島歴史資料センター黎明館刊 平成七
川野和昭「カタギイテゴ」の作り方と分布と文化の地域性」、『黎明館調査研究報告』第二二
集 鹿児島歴史資料センター黎明館刊 平成一一

- (2) 小野重朗「肉から餅への変遷」、『農耕儀礼の研究』弘文堂刊 昭和四五 原題「肉と餅との連続―供儀儀礼について―」・「日本民俗学」七一号 昭和四五

本稿の奄美・沖繩の事例の多くの事例を小野重朗先生の同書から引かせていただいた。もとより引用の範囲を超えてはいると思われるが、生前の先生の「あなた方は私の論文の資料を生
の資料として新しいことを考えなさい」という言葉に甘えて、お許しを得たいと思う。なお、

小野先生の事例の中に見られる「部落」という表記は、差別的な意味を含む表現ではなく「集落」の意味で用いられており、本来「シマ」と表現すべきものであるが、当時の先生が翻訳されるに当たり、適切な語として「部落」を選択されたということを考慮し原点のままとした。また、山下先生の事例についても同様である。

- (3) 小野重朗前掲書
(4) 小野重朗前掲書
(5) 岩倉一郎「喜界島年中行事」・小野重朗前掲書
(6) 『沖繩民俗』第一〇号・小野重朗前掲書
(7) 山下欣一「奄美のシャーマニズム」弘文堂刊 昭和五二・基礎論文「沖永良部島における創世神話と動物供犠」・『南日本文化』五号・鹿児島短期大学南日本文化研究所 一九七二
(8) 山下欣一前掲書
(9) 小野重朗前掲書
(10) 小野重朗前掲書
(11) 『沖繩民俗』第五号・小野重朗前掲書
(12) 山下欣一「奄美のシャーマニズム」弘文堂刊 昭和五二・基礎論文「与路島・請島のノロとユタ」・『南日本文化』八号・鹿児島短期大学南日本文化研究所 一九七五
(13) 山下欣一前掲書
(14) 岡本恵昭「葬送習俗「魔よけ」」・『南島研究』第一九号 昭和五三
(15) 栄友直「徳之島小史」徳之島民俗学会編 一九六三
(16) 柏常秋「続沖永良部島民俗誌」柏常秋著書刊行会 一九六五
(17) 小野重朗前掲書
(18) 川野和昭「ラオス北部のランテン族の仮面行事―ルアンナムタ県ナムル村の例から―」、『かしま文庫』より57「春苑堂刊 平成一一
下野敏見氏は、「民族学から原日本を見る」(吉川弘文館・平成十一年一月)の中で、このナムル村の「アイマンロー」と思われる儀礼について「ラオス北部山地のランテン族は、正月の家でのビーの祭りに主人が木彫りの仮面を付け、ヒューンコンクという仮面神になって祈ります」と述べて、奄美のトシドンや悪石島のボゼ、硫黄島のメンドンなど正月や盆、八朔などの来訪神と関連づけて紹介されている。しかし、筆者が村長や村長の家族に聞き書きしたところでは、病気の平癒祈願と赤字の名付け以外にはヒイコンクを伴う「アイマンロー」をすることはなく、主人が「アイマンロー」になることもないということであった。
- (19) 川野和昭「正月儀礼食考(二)―豚骨料理食習俗をめぐって―」・『稜雲』鹿児島県立甲陵高等学校刊 昭和六三

